

Title	「野盗の城」と「アッシャー家の崩壊」：H. クラウレンとE.A. ポーをつないだ翻訳について
Sub Title	「野盗の城」と「アッシャー家の崩壊」：H. クラウレンとE.A. ポーをつないだ翻訳について Das Raubschloß und The fall of the house of Usher : Intertextualität bei H. Claren und E.A. Poe
Author	識名, 章喜(Shikina, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.121- 138
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0121">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0121</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「おいはぎ野盗の城」と「アッシャー家の崩壊」

— H.クラウレンとE.A.ポーをつないだ翻訳について —

## 識名 章喜

### 1. 「アッシャー家の崩壊」の翻訳者アルノ・シュミット

E. A. ポーの短篇「アッシャー家の崩壊」（以下「アッシャー家」と略記）（1839）は、18世紀末から19世紀初頭にかけて流行した英国ゴシック小説の伝統を独自の手法で蘇生させた「ポーという作家の代名詞として語り継がれてきた名作中の名作」（巽孝之）である。<sup>1</sup>「暗示のもつゴシック的な力を使い」、不気味で得体の知れない「恐怖を悲劇の高みへと押し上げた」<sup>2</sup>この作品については、ポーが親しんだドイツ・ロマン派の影響も色濃く、「病める友人の精神世界の少なからぬ部分を形成してきた」（177）書斎の蔵書にはティークのメールヒェン小説『青い彼方への旅』<sup>3</sup>が並べられていた。一族の破滅と命運をともしする陰鬱な屋敷が象徴的に描かれる点において、E. T. A. ホフマンの古城綺譚「世襲領」（Das Majorat）との類縁性も指摘されている。<sup>4</sup>

しかし「アッシャー家」のアイデアの重要な原拠のひとつを突き止めたのは、ポーの作品の翻訳を手がけた西ドイツの作家アルノ・シュミット（Arno Schmidt: 1914～1979）である。方言や俗語を交えた会話文と略語を多用したメモ風文体を駆使し、J. ジョイス流の〈意識の流れ〉を言語化する前衛的な試みによって、戦後登場した新人のなかでもひとときわ異彩を放った孤高の作家として知られる。学者としての正規の教育は受けなかったものの、文学史に埋もれた作家や作品の再発見に情熱を捧げ、20年に及ぶ地道な資料収集のうえ書き上げたフケー伝（1959）は今なおこれを凌ぐ研究は出ていないほどの労作だ。一方若いころからポーの文学に傾倒していたシュミットは、「アッシャー家」に対しては格別の思い入れがあり、1966年から順次発売された4巻本のドイツ語版ポー作

品集では、後にジョイスの『ユリシーズ』を訳すことになる作家のハンス・ヴォルシュレーガーとともに翻訳を担当した。<sup>5</sup> 従来のドイツ語訳に不満を抱いていたシュミットは創意に溢れた新訳に挑み（ドイツ語訳は„Der Fall des Hauses Ascher“で、原語のUsherを、ドイツ人の語感に合わせAsche「灰」との連想が働くように、あえてAscherにした）、現在に至るまでドイツ語版「アッシャー家」の定訳とされている。<sup>6</sup>

この翻訳の出版に先立ち発表されたエッセイ「ケース・アッシャー」（Der Fall Ascher）が研究史上のまさに「事件」（Fall）となった論考にはかならない。<sup>7</sup> シュミットは英米圏での素材研究の不徹底を指摘し、ポーの恐怖の美学の完成度を讃えつつ、ポーがドイツ・ロマン派の作品に親しんで、その影響下あったことを論じている。

エドガー・ポーは全面的にヨーロッパの伝統から物語をつむぎだした作家で、1800年後間もないころのドイツ文学に親しんでいたことはあまりにも有名である。この時代の文学はポーにとっては同時代の作家とってよかった。フケーについては「アイスランド人ティオドルフ」を知っていた。今では読む者がほとんどいないような作品である。あの「ウンディーネ」についてはじっくり研究し、ポーならではの比類なき感覚で「内なる証拠」に基づき、自伝的な事実があるにちがいないと推論したほどだ。ポーがティークを高く買っていたことも、われらが「アッシャー家」からわかる。いやそれ以上かもしれない。1835年に出版された外国の本をたった4年後に読み、ただちに正しく評価し、ひろく推薦したことをもって推して知るべし。さらに言えば、私たちがあまりに性急に片隅に追いやったドイツの大衆小説までも知っていたことも、ここで例証してみせよう。1812年に袖珍文庫本「休養娯楽」（Erholungen）に掲載されたハインリヒ・クラウレンの短篇小説「野盗おいはぎの城」（Das Raubschloß）である。<sup>8</sup>

シュミットは新発見にやや気負いすぎているところがある。ロデリックの架空の書齋に並べられていたティークだが、読んだとすれば1835年刊行の文芸袖珍文庫『ウラーニア』に掲載されたドイツ語原典ではなく、同年パリの雑誌に載った仏訳（„Le Voyage dans le bleu“）のほうだろう。ともあれ、シュミットは現在

では誰も読まない19世紀前半の人気作家クラウレンを特定したことが言いたいのである。

このエッセイのなかで、クラウレンの「野盗おいはぎの城」と「アッシャー家」との類似点が列挙されているが、主な共通点は、花の盛りに早逝した女性が地下廟の棺におさめられ、雷鳴の聞こえる嵐の夜に廃墟で奇妙な出来事が連続する、ということにつきる。ゴシック風の室内と書架と死者の葬儀について書かれた本という道具だて、さらには歌が挿入される点を加えてもよい。アイデアの盗用に人一倍敏感な作家の見方として、これらはポーの「剽窃」に近いのではないかと、やや冗談めかしながらシュミットは問題を投げかけている。この見解に対してドイツ語版ポー作品集の編纂・注釈を担当した英米文学研究者のクーン・シューマンは、他の作品との関連も広く考慮に入れ、シュミットの断定にはやや慎重な姿勢を示す。<sup>9</sup> またクラウレン短篇集のリプリント版の編者ポールマン夫妻も、ポーの「アッシャー家」との共通点は若い女性が地下室の棺に安置される点のみと、シューマンを引き合いに出して留保をつけている。<sup>10</sup>

アルノ・シュミットは死後、ドイツ人の文学通の間でカルト的な人気を博し、なかでもドイツの有名な煙草会社の創業者フィリップ・レームツマの息子である文学研究者ヤン・フィリップ・レームツマ (Jan Philipp Reemtsma:1952~) がシュミットの遺稿を管理する財団を1981年に設立し、その財政的支援によってシュミットの作品全集となるバルクフェルダー版が順次刊行され、さらに1986年には〈アルノ・シュミット協会〉(Gesellschaft der Arno-Schmidt-Leser 略称 G A S L) が発足、シュミットが残した課題を熱烈なファンが追いかける機運が生まれた。この協会のサイトにポーが参照したであろう典拠が掲載されている。<sup>11</sup> スコットランドの文壇・論壇を代表する老舗雑誌「ブラックウッドのエディンバラ・マガジン」1828年12月号に匿名で掲載された短篇「野盗おいはぎの砦」(The Robber's Tower) がそれである。<sup>12</sup> G A S L のサイトではその訳者、または翻案者名に John Hardman の名前を挙げているが、この人物についての詳細は記されていない。

ウィリアム・ブラックウッド (William Blackwood:1776~1834) の雑誌は1817年に創刊された総合誌で、論説(政治・科学・哲学)や紀行文、詩、書評、結婚・死亡広告といったジャーナルならではの記事と並んでさまざまな趣向の短篇小説も読者を惹きつける大きな魅力となっていた。<sup>13</sup> その〈ショート・フィクション〉の影響を受けた文学者にはディケンズやブロンテ姉妹など錚々たる顔ぶ

れが挙げられる。ポーもその一人で、「アッシャー家」発表前年の1938年に、「ありとあらゆる主題についてのもっともすぐれた文章が、当然の名声をもっているあの雑誌」と呼び、皮肉を込めて「ブラックウッド風の記事を書く作法」<sup>14</sup>なる戯文を寄稿している。それだけよく読み込んでいたという証でもあろう。

1828年12月号の読み物として掲載された「野盗の砦」<sup>おいはぎ</sup>には副題があり「本当にあった出来事」(A true Adventure)とされている。匿名であることから、それが実際にあった事件として読まれることを狙ってか、Adventureという単語を副題に入れることで、「お話し」としての創作を匂わせているのか、いずれにせよ後にこの雑誌が「ホラー・フィクション」なるジャンルの確立に大いに貢献した文学史的意義を考えると、体験談と文学的創作の分離が不分明な過渡期の時代の作品と捉えることもできよう。

だが面白くなってくるのは、エディンバラ・マガジンの「野盗の砦」<sup>おいはぎ</sup>が先にアルノ・シュミットが発見した大衆娯楽作家ハインリヒ・クラウレンの「野盗の城」<sup>おいはぎ</sup>の〈超訳〉だった点である。<sup>15</sup>そもそも題名が酷似しているうえ、クラウレンの短篇の副題は「文字通り本当にあった話」(Eine buchstäblich wahre Geschichte)で、副題までほぼ同じである。

## 2. H. クラウレンの「野盗の城」<sup>おいはぎ</sup>

ポーが参考にしたであろうブラックウッド・マガジンの「野盗の砦」の原典となったドイツ語テキストのあらすじはおおよそ次のようになる。ネタばれのような記述になってしまうが、そこは論文の性質上やむをえない。

主人公の「私」は14年ぶりにシレジアのリーゼンゲビルゲ山地の所領に住む叔母一家を訪ねることになったが、近隣の町で、二人いる叔母の娘の下のツェツィーリエが最近「猩紅熱」で亡くなったことを知りショックを受ける。久しぶりの再会が弔意を告げることになったが、ツェツィーリエがいまわの際に、土葬せずに遺体を入れた棺は、地元の人たちから「野盗の城」と呼ばれている、屋敷から山の方へ登った岩場の斜面にある廃墟の地下室を靈廟にして安置してほしいと懇願したので、そうしたと聞く。主人公は叔母が手を入れ趣味よく整備された、見晴らしのよい廃城の一室に泊まることを申し出て、ツェツィーリエの眠る地下廟の真上に旅の荷物を運ばせた。

この寝室のそばにゴシック風の騎士の間が昔の面影を残しながら新たに修復されていたが、騎士ブルーノと彼を倒したこの城のかつての所有者騎士ゴットハルトの史実に基づいた一騎打ちの絵がかけられ、血まみれで倒れて悶絶の表情を浮かべ呻き声をあげるブルーノの姿に主人公は改めて強烈な感銘を受ける。かつて地下牢があり、今では物置に使っている角塔に続く廊下の入り口には嚴重に施錠された黒い扉があり、青ざめた尼僧の肖像画が掛けてあった。それが富裕な伯爵の娘レア姫のものだった。彼女の悲劇も主人公の記憶に蘇る。ゴットハルトとひそかに婚約していたレアだが、他の男との結婚を望んだ父親が娘をブレスラウの修道院に入れてしまう。ゴットハルトはレアを修道院から誘拐し、この城に連れてきたものの、レアはゴットハルトの子供を産むと良心の呵責からその子を殺し、自ら毒を仰いだ。レアはゴットハルトが殺害したブルーノの娘だった。地元の伝説ではレアは墓で安らぎを得られず、ブルーノの霊も今だこの地上をさまよっている、というのである。

夜になると嵐になり、外から雷鳴が聞こえる。部屋の書架には亡き叔父の遺した蔵書があり、なかなか寝つけない夜の読書用にと手にとった小型の袖珍本文庫は、13世紀の騎士団の儀式について書かれた本で、たまたま開いた頁には「私」の遠い先祖にあたる騎士団員の葬儀の様子が詳細に描かれていた。夢中になって読みはじめると書物のなかの死者追悼の場面と同じように、鉄と鉄のふれあう音が誰もいない城のなかから三度にわたって聞こえ、さらには呻き声のようなものまで聞こえてくる。主人公が窓を開けると、真下の地下霊廟から灯りが漏れ、かすかに女の歌声がする。思わず剣を手に廊下に出て、地下室に降りてゆくとツェツィーリエの棺に金髪の女性の姿が見え、「私」は思わず「ツェツィーリエ！」と恐怖の叫び声をあげるも、一瞬のうちに灯りが消えてしまう。いったん寝室へ戻ると、また奇妙な音が聞こえる。廊下に出て騎士の間まで来ると、ダスターコートの手をつかまれ、「私」は手に持った剣で背後を刺しまくるが、それは鉄製の暖炉の開口部に裾がひっかかっていただけだった。

翌朝叔母一家が朝食を一緒にと「私」の部屋までやってくる。そこで明かされたのは昨晚遅く嵐のなか、郡長の娘のイエットヒェンとその花婿が屋敷を急用で訪ずれたので、最期の別れにと地下の霊廟に案内したこと、みんなで追悼の気持ちを込め、花婿がユーリエの堅琴で伴奏し女性たちが歌声を合わせていると、突然「ツェツィーリエ！」という叫び声が聞こえ、みな慌てて灯りを消し屋敷に

帰った顛末が明らかにされる。

以上が大筋だが、クラウレンは雑誌「休養娯楽」(Erholungen) 初出の1812年版と同じものを1818年刊行の袖珍本文庫版『冗談と真面目』(Scherz und Ernst)、さらには1827年刊行の『著作集』に再掲させている。1818年版では第1小巻の三つ目の短篇に「野盗の城」(S.70~S.123)が掲載され、背後で外套の裾を引っばる者を剣でめった刺しにする箇所、「第2小巻に続く」とあり、第2小巻の冒頭(S.169~S.178)に「第1小巻で中断した物語の謎解き(Aufschluß)」として種明かしがされる構成になっている。<sup>16</sup> シュミットが参照したのは「1825年のヴィーン版リプリント」ということだが、ブラックウッド・マガジンの訳では二つの部分が分けられていない。

ポーにつながる英語訳(1828)が、クラウレンの原作からのかなり自由な翻訳であるうえ、英訳者がクラウレンの名前を出すことなく匿名にしたのは、まぎれもない「剽窃」だろう。その点シュミットがポーの「剽窃」とするには無理がある。

著作権すら十分確立されていなかった時代の翻訳についてうるさいことを言ってもしかたないが、訳者が英語圏での読者向けにドイツの作者の名を挙げなかったのは、クラウレンがゲーテやシラーなどすでに英国で名の知られた作家ではないとふんで甘く見たのだろうか、存命中の原作者の頭越しに翻訳を自分の創作に変えてしまったのは故なしとしない。ただ「H. クラウレン」の名とその代表作は、ロンドンでドイツ人の出版人だったR. アッカーマンなる人物が編集した文芸年鑑「忘れな草」(Forget Me Not)の1824年版を通してすでに知られていた。<sup>17</sup> それもクラウレンの出世作と言われる甘口ロマンスの『ミミリー』(Mimili)である。ともあれクラウレンの大量の作品群からゴシック系の短篇を選んだエディンバラ・マガジンの慧眼は褒めていい。さすがにホフマン『悪魔の霊液』の英訳を一早く出版したウィリアム・ブラックウッドだけある。<sup>18</sup>

### 3. ハインリヒ・クラウレンについて

ここで肝心のクラウレンについて触れておく。<sup>19</sup> ハインリヒ・クラウレン(Heinrich Clauren: 1771~1854)は19世紀初頭のドイツ語圏で絶大な人気を誇っ

た大衆作家だった。後年ハイネによって「クラウレンを読まずして売春宿に足を踏み入れられなかった」<sup>20</sup>と揶揄されたが、現在では文学史記述でもほとんど顧みられることがない。

クラウレンはペンネームで、しばしばH. Clauren とだけ記される。本名はカール・ゴットリーブ・ザームエル・ホイン (Carl Gottlob Samuel Heun)、Heinrich Clauren の筆名は Carl Heun のアナグラムだと分かる。ホインは東部ドイツ、ニーダーラウジッツにあるドーブリルク Dobrilugk で生まれた。父親はザクセン選帝侯国の役人だった。この町は現在ブランデンブルク州の合併都市ドーバルク-キルヒハイン Doberlug-Kirchhain に含まれ、修道院で有名である。クラウレンが生まれた頃はザクセン領だった。クラウレンはライプツィヒで法学を修め、博士号を取得後は官吏の職を転々としながら、出版業にも手を染め、「イエーナ文芸新聞」の編集者を務めるかたわら文筆家としても活動を始める。1811年から15年の間はプロイセンのハルデンベルクのもとで働き (1813年に宮中顧問官)、その後ザクセン王国に派遣され、1820年にはベルリンに戻り、枢密宮中顧問官へと昇進を果たし、郵便局の管轄業務に携わった。学生時代からフリーメーソンの会員になり、このときの体験は「野盗の城」においてもテンプル騎士団員の葬儀の描写に認められる。主人公の手に取った本が13世紀の儀式について書かれたものとしながら、「大頭領」や「徒弟」といったフリーメーソン独特の位階を示す用語や執拗な3回の繰り返しなど、明らかにフリーメーソンの儀式を思わせるものになっている。本来フリーメーソンの儀式の詳細は外部に漏らしてはいけないとされているが、すでにモーツァルトの歌劇『魔笛』やゲーテの長篇『ヴェルヘルム・マイスター』、ジャン・パウルの『見えないロジ』にも描かれているので、とくに問題とはならなかったのだろう。

クラウレンが流行作家として脚光を浴びるのは対ナポレオン解放戦争後、読み物への需要が大きく変化した時期に感傷的な恋愛小説の量産を始めてからである。1816年の『ミミリー』の成功をきっかけに、さしずめハーレクイン・ロマンスのような手頃な中短篇を矢継ぎ早に発表していく。1821年には『熱情と愛』、『愛の純粹すぎる犠牲』、1822年の『人生の至高は愛』、『ディジョンの娘レースヒェン』、1825年には『愛されっ子』など、王政復古期の読者の保守的な趣味嗜好に合わせ、1823年から1827年の数年間に『冗談と真面目』など袖珍本文庫版シリーズで40巻もの作品を世に送った。<sup>21</sup>



当時のクラウレンと人気を二分したのがあのE. T. A. ホフマン（1776～1822）だった。余談ながらホフマンがベルリンでクラウレンと面識をもった唯一の記録がホフマンの日記に残っている。1815年3月1日、午前中大審院で法務につき、午後知人宅で「宮中顧問官ハイン（Hofrat Hein）」に会うと本名を誤記している。<sup>22</sup>この時期のホフマンは畢生のオペラ『ウンディーネ』の準備に追われる一方、『夜景作品集』に収録する短篇「アルトゥス宮」の執筆中だった。後に自分も流行作家の仲間入りをすると、クラウレンの原稿料を引き合いに、報酬の増額を出版社に追ったりしているのが面白い。

#### 4. 英語翻案版の位置づけ

さてクラウレンの「野盗の城」とその英語翻案版「野盗の砦」、ポーの「アッシャー家」との間テキスト性から何が見えてくるだろうか（詳細は本稿末尾の作品対照表に譲る）。アルノ・シュミットのポー「剽窃」説は言いがかり、もしくはクラウレンの小説の過大評価だろうか。ブラックウッド・マガジンがクラウレンの存命中に明らかに作品を盗用したことも間違いない。英語版では舞台がナポレオン戦争後のシレジア、つまりドイツ語圏を舞台とした話であることがより分かるように原文にはない時代背景や地理上の説明が加えられている。叔母も「男爵夫人」と呼ばれ、主人公の「私」は解放戦争で負傷したプロイセン軍の「大佐」であり、二人とも貴族階級に属することがより明示的になっている。これも英語読者を念頭においた翻訳・翻案ならでは補足である。

原典からの訳であることを意識的に隠す設定や固有名詞の変更もある。亡くなった叔母の娘セシリアは18歳の姉の方で、妹のジュリアは17歳。主人公の荷物を山の廃城に運ぶ老獵師の「ニクラス」は英語版では「ボヘミアの獵師の老カスパー」となっている。これはカール・マリア・フォン・ヴェーバーのオペラ『魔弾の射手』の登場人物からの借用だろう。「騎士ブルーノ」には「ロートフェルス」(of Rothfels) という名前が加えられている。主人公が手にとった本に記述された Templar 騎士団の葬儀は、13世紀の出来事ではなく、「1190年のプラハ」になっている。また地下廟から聞こえてくる音楽は英語版では「モーツァルトのレクイエムの素晴らしい冒頭部」である。そのほか原典との細かい異同は枚挙にいとまがない。

種明かしが終わったあとにも原典にはない2段落が付け加えられ、主人公がユーリアの夫となるハッピーエンドが待っている。ドイツ語圏の研究者から「かなり自由な翻訳」と呼ばれるゆえんである。

もっともシュミットが指摘する「嵐」や「雷鳴」と「廃墟」は、英国のゴシック小説やドイツの幽霊小説では、あまりにありふれた設定であり、ポーはその伝統に沿って創作したまでであり、たしかにポーがブラックウッド・マガジンの「野盗の砦」を読んでいたことは想像にかたくないが、それをもってポーのクラウレンからの間接的影響と捉えるには難があるようにも思える。

この短篇が掲載された1820年代後半に英独両国で、廃城をテーマとした幽霊物語が大流行していた事情を考えれば、英語翻案者がクラウレンを文字通り剽窃したにしても、似たような物語がドイツ語でも英語でも大量に書かれ、出回っていたのである。

遅れてきたロマン派の作家ヴィルヘルム・ハウフ(Wilhelm Hauff: 1802～1827)がゲーテ全集の版元で有名なコッタ社の新聞「教養ある人々のための朝刊紙」(Morgenblatt für gebildete Stände)に連載した「書物と読書世界」(1827年)という題のエッセイがある。ハウフの文章は、10年後ポーがブラックウッド・マガジンについて書いたのと同じような調子の戯文になっていて、そこから当時の大衆娯楽小説の人気の一端がうかがえる。

ハウフが「貸本屋」(Leihbibliothek)にどういう本が売れるのか調査にいくと、主人が苦々しく「読者公衆の趣味」について語りだす。カタログ番号でクラウレンの作品のどれかがすぐわかるほどであるし、伯爵夫人の好みは「幽霊物語」だが、あいにくみんな貸し出されてしまっている。深夜勤務の兵隊は作者の名前もわからずにスコットの小説を借りにくる。

そこで「私」はスコットの小説の翻訳がさながら工場のように次から次へと行われる出版社の話を書く。1階が輪転機の廻る30時間で文庫本を生産できる印刷所、2階には翻訳チームが常駐し、朝8時にスコットの小説が渡され、午後3時までには粗訳を完成させなければならない。7、8人の下訳者に1名の文体家がいる、原書を片手にチェックし、文章を整え、別室には詩の翻訳を専門とするスタッフがいる。こうしてスコットの歴史小説の翻訳が量産されているというのである。これは誇張ではなかったようで、あの作曲家シューマンの親が経営していたツヴィカウの出版社が1821年からウォルター・スコットの作品を廉価な文庫

版シリーズとして刊行していた事実を基にしていた。<sup>23</sup>

クラウレンとスコットという当時の人気作家は相互に翻訳されていた。英独両国の同時代の趣味趣向はほとんど似通っていたのである。

だからこそ恐怖の舞台としての廃城や地下室はもちろん、雷鳴や深夜の物音、死者の復活、遠くから聞こえてくる歌声や暗示的な韻文の挿入というゴシック小説の道具立ては読者の期待を裏切らないための共通の約束事のようなものであって、英独両国が相互に影響しあって確立されたものといえよう。ポーの独創性はその約束事を越えた恐怖そのものの美学化にあった。ただクラウレンのような合理的な種明かしに終わる幽霊物語が19世紀前半のドイツで大流行したことは、後の推理小説の発展にもつながる一面があり、ほとんど忘れ去られてしまったクラウレンの再評価の一助になればと願いつつ本稿を掲ぐ。

## 註

- 1 本論では原作の引用は新潮文庫版の巽孝之訳を用い、引用末尾の（ ）内に頁数のみを示す。エドガー・アラン・ポー『黒猫・アッシャー家の崩壊—ポー短編集Ⅰゴシック編』、巽孝之訳、東京：新潮社（新潮文庫）、2009年。
- 2 デヴェンドラ・P・ヴァーマ『ゴシックの炎 イギリスにおけるゴシック小説の歴史 その起源、開花、崩壊と影響の残滓』（原著1957年）、大場・古宮他訳、東京：松柏社、2018年、338-9頁。
- 3 ティークの短篇の原題は「古い書物と青い彼方への旅」（Das alte Buch und die Reise in's Blaue hinein）で、袖珍文庫本『ウラーニア』の1835年の巻に掲載され、ティークの晩年を代表する作品のひとつとなった。初期のロマン派全盛期を彷彿させるメーメルヒェンのモチーフと当時のジャーナリズムで活躍しはじめたハイネやベルネなど政治的な「若きドイツ」の詩人たちを諷刺する部分とが混在した構成になっている。余談だがアメリカのポー研究者は1935年の段階でもまだこの作品を不明としていたが、ようやく1954年になってその誤りが正された。Marianne Thalmann: Anmerkungen. In: Ludwig Tieck: Novellen. München: Winkler 1965, S.1098.
- 4 マボットの全集版の注解を参照。Collected Works of Edgar Allan Poe. Tales and Sketches 1831-1842. Edited by Thomas Ollive Mabbott. Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press 1978, p.394. ホフマンの英訳は死後2年後の1824年には長篇『悪魔の霊液』がエディンバラのブラックウッドから出版され、1826年には「世襲領」を含む『ドイツ短篇選集』が訳されていた。Gerhard Salomon:

- E.T.A.Hoffmann. Bibliographie. Zweite, verbesserte und vermehrte Auflage. (1927) Hildesheim-Zürich-New York: Georg Olms 1983, S.47 und 52.
- 5 Edgar Allan Poe: Werke in vier Bänden. Herausgegeben von Kuno Schumann und Hans Dieter Müller. Übersetzt von Arno Schmidt und Hans Wollschläger. Olten: Walter Verlag 1966-1973. 「アッシャー家」はこの1.Band(1966), S.635-664.に収録された。この翻訳作業は1963年12月に着手され、足掛け10年をかけて完遂した。
- 6 シュミット訳の卓越性については多くの論考があるが、ここではヴォルフガング・クラインの論文のみを挙げておく。Wolfgang Klein: Geile Binsenbüschel, sehr intime Gespielen. Ein paar Anmerkungen über Arno Schmidt als Übersetzer. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 84(1992), S.124-129.
- 7 Arno Schmidt: Der Fall Ascher. (in: Deutsche Zeitung, 22.2.1964),引用は以下の改稿版による。Arno Schmidt: Aus julianischen Tagen, Frankfurt am Main: Fischer 1979, S.128-140.
- 8 Ebenda. S.133f.
- 9 ドイツ語版ポー作品集の注釈では、シュミットのエッセイの書誌情報が挙げられながら、クラウレンの作品名が「幽霊の城」(Das Geisterschloß,1812)と誤記されている。ちなみにGesiterschloßを題名にしたものは誤解を招くほど多い。1811年に出版されたアーベル/ラウンの『幽霊綺譚』(Gespensterbuch)第3巻にアーベル (Johann August Apel:1771~1816) の短いアネクトド「幽霊の城」(Das Geisterschloß) が収められており、長篇小説にはテオドール・ヒルデブランドト (Theodor Hildebrandt: 1794~1859) の『幽霊の城または死者の地下室での復活』(Das Geisterschloß oder Die Auferstehung im Todtengewölbe, 1824) などがある。そもそも「アッシャー家」の本文に挿入されたロデリックの詩「魔の宮殿」(The Haunted Palace) をシュミットはGeisterschloßと訳していた。
- シューマンはこれまでに種本とされた作品として、ホフマンの「世襲領」(Das Majorat, 1817) やアルニムの「世襲領主」(Die Majoratsherren, 1822)、ティークの「アブダラー」、さらにはウォルター・スコットの「ラマームア丘陵の花嫁」(The Bride of Lammermoor, 1819)、「ブラックウッド・マガジン」の1830~37年までに掲載された短篇「亡き物理学徒の日記からの断片」(Some Passages from the Diary of a Late Physician)などを挙げている。Edgar Allan Poe: Werke. Erster Band. Herausgegeben von Kuno Schumann und Hans Dieter Müller. Olten: Walter Verlag 1966. S.1027f.
- 10 H.Clauren: Das Raubschloß und andere wahre geschichten. Mit einem Nachwort herausgegeben von Axel und Nina Pohlmann. Bonn: Venusberg Verlag 1995, S.102.
- 11 [http://www.gasl.org/refbib/Hardman\\_The\\_Robbers\\_Tower.pdf](http://www.gasl.org/refbib/Hardman_The_Robbers_Tower.pdf) (閲覧日: 2020年10月7日)を参照されたい。
- 12 The Robber's Tower. A true Adventure. In: Blackwood's Edinburgh Magazine, No. 24, December 1828, pp. 872-884.
- 13 ブラックウッドの雑誌に掲載された「物語」(Tale)の長さは2500語から25000語、

- 平均11000語で、短篇小説の標準を作ったと言われる。Wendell V. Harris: *British Short Fiction in the Nineteenth Century. A Literary and Bibliographic Guide*. Detroit: Wayne State University Press 1979, p.28.
- 14 「ブラックウッド風の記事を書く作法」(大橋健三郎訳)、『ポオ全集』第3巻、東京：東京創元新社、1963年、250頁。
- 15 原題にある Raubschloß を「野盗<sup>おいはぎ</sup>の城」としたが、訳語についてドイツにおける城砦の歴史やゴシック趣味の文脈から補足しておく。「略奪、強奪」を意味する Raub は「奪う」という基礎動詞 rauben から派生した名詞で、それを Schloß「城、城館」と結びつけた単純な合成語なため、立項している辞書は多くない。少ない例を示せば、「盗賊騎士の根城」(相良守峯『大独和辞典』、博友社)や「盗賊騎士の城、野武士の館」(小学館『大独和辞典』)など説明的な訳語が当てられている。後者は日本の戦国時代を連想させるが、ヨーロッパ中世の城砦群が近世以降辿った運命をおさえておく必要がある。城砦はその維持管理が面倒なため、領主や地主貴族によって廃墟のまま放置され、時代が下るにつれ、強盗団の拠点や犯罪者の隠れ家となるケースがまれではなかった。そのため廃墟の城がそう呼ばれ、怪しい人の出入りが18世紀末から19世紀初頭にドイツ語圏で流行した〈秘密結社小説〉や〈幽霊物語〉の舞台となったゆえんである。英語翻案版の *The Robber's Tower*の方が塔をそなえた城砦のイメージが容易に理解できる訳語と言えるかもしれない。
- 16 本稿では1818年版を底本とした。Scherz und Ernst von H. Claren. Dresden: in der Arnoldischen Buchhandlung. 1818. (Galeのリプリント版)、ちなみにアクセル&ニーナ・ポールマン編集の Claren: *Das Raubschloß*. Bonn: Venusberg Verlag 1995, S.7-42. を適宜参照したが、この本は1827年の『著作集』を底本にしたと称しながら、現代の読者向けに、語の言い換えや多くの削除が加えられた問題の多い編集版である。
- 17 Forget Me Not, 1824, London: Rudolf Ackermann, p.38-103.
- 18 Gerhard Salomon: A. a. O., S.48. *The Devil's Elixir*: from the German of E.T.A. Hoffmann [2 Bände] William Blackwood, Edinburgh: and T. Cadell, London 1824.
- 19 クラウレン (ホイン) の経歴については *Deutsche Biographie* および *Killy* の *Lexikon* に拠った。
- 20 Heinrich Heine: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Herausgegeben von Manfred Windfuhr (Düsseldorfer Heine-Ausgabe). Bd. 6: *Briefe aus Berlin. Über Polen. Reisebilder I/II*. Hoffmann und Campe, Hamburg 1973, S. 212.
- 21 Hainer Plaul: *Illustrierte Geschichte der Trivialliteratur*. Leipzig: Edition Leipzig 1983, S.223.
- 22 E.T.A. Hoffmann: *Tagebücher*. Nach der Ausgabe Hans von Müller mit Erläuterungen herausgegeben von Friedrich Schnapp. München: Winkler-Verlag 1971, S.266.
- 23 Wilhelm Hauff: *Die Bücher und die Lesewelt*. In: Wilhelm Hauff: *Sämtliche Werke*. Band III. München: Winkler Verlag 1970, S.55-71.

作品対照表

作成：識名章喜

クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)	ポー「アッシャー家」(1839)
Heinrich Clauen: <i>Das Raubschloß</i> . In: "Scherz und Ernst von H. Clauen", Dresden 1818. S.70-123. およびS.169-178.	<i>The Robber's Tower</i> . In: Blackwood's Edinburgh Magazine, No.24, December 1828, p.874-884.	ポー「アッシャー家の崩壊」、巽孝之訳『ポー短編集Ⅰ ゴシック編』、東京：新潮社（新潮文庫）、2009年、151-191頁。
題名「野盗の城」(Das Raubschloß) 副題「文字通り本当にあった話」(Eine buchstäblich wahre Geschichte)	題名「野盗の砦」( The Robber's Tower) 副題「本当にあった出来事」(A true Adventure)	
「私」の報告、時代は示されない。	「私」は「諸国民戦争」で重傷を負い、1815年の秋にようやく叔母を訪問。	「わたし」の語り、時代・場所は明示されない。
リーゼンゲビルゲに所領を持つ叔母のヴァルター家を所用のついでに訪問。(70)	ベルリンから5日ほどの旅でエルベ河源流に位置する叔母のボヘミアの所領に向かう。叔母は「男爵夫人」とされる。	秋、「無類なほど鬱蒼とした地方」(155)の旅。
幼年時代世話になって以来14年ぶりの再訪。(71)	「子どもの頃以来会っていなかった。」(874)	子供時代の親友のひとり、ロデリック・アッシャーを訪問するが、「最後に会ってからもう何年も連絡が途切れていた。」(157)
近くの駅通で噂：叔母の2人の娘のうち、下のツェツィーリエが最近「美しい花盛りの年齢」(=16歳)で「猩紅熱」により亡くなったと聞き知る。(71) 姉がユーリエ。(74)	左にほぼ同じだが、「熱病」で亡くなったのは18歳の長女セシリア、妹のジュリアは17歳。(874)	
主人公は「制服の左腕」に「黒の喪章」を付けて叔母の屋敷へ。(72)	「私は制服の袖に喪章を巻いた。」(874)	
「古い朽ち果てた廃墟が、居館を見下ろす巨大な山の上に鎮座し、あたり一帯では野盗の城という名前で知られていた」(72)	「小高い丘の斜面に新しく瀟洒な叔母の屋敷があり、樹木の茂った公園に囲まれ、その上の方、暗く険しい岩の上に、朽ち果ててはいるものの、まだ威厳を保つ城が見えた。老叔父が先祖から受け継いだ城で、古くからのいかにもそれらしい〈盗賊の砦〉という名で呼ばれていた。」(874)	「アッシャー一族の墓地というのが辺鄙な場所にあるうえに野ざらしになっている」(178)
「廃墟は叔母の屋敷から数千歩ばかり離れた、歳月で丸く切り取られた岩場の上にあった。そこへの径は樹齢百年を超える檜の小さな森を抜けていくのだが、森は屋敷の庭の一部となっていた。廃墟の周囲は前の所有者の時代から公園のようになって、その主役たる廃墟の性格をそなえていた。空高く伸びた縦ノ木の暗さと垂れさがる柳の優しい緑が印象的だった。」(75f.)		
悲しみの再会で叔母の発した第一声：「(どうしてあなたは)、叔母は小声で、泣きはらした顔を私の肩に寄せて言った、〈どうして1と月早く来てくださらなかったの?〉…」(73)	「親愛なる甥っ子よ」と叔母はこらえきれなくなって、低いかす声でこう言った。〈どうして3週間早く来てくださらなかったの?〉…」(874)	

クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)	ポー「アッシャー家」(1839)
ツェツィーリエは土中に埋められるのが怖くて、母親である叔母に遺言として廃城の半は朽ちかけた地下室を地下廟に変えて、そこに安置してほしいと願いでる。	「大きな円塔の下の地下室を地下廟に変え、そこに彼女の棺を釘打ちせず、開いたままの石棺のなかに置く」(875) よう母親に言い残す。	「その屍を二週間ほど(最終的な埋葬をするまでのあいだ)この屋敷の中にある無数の地下室のひとつに保存しておくつもりだと明かした」理由は「アッシャー一族の墓地というのが辺鄙な場所にあるうえに野ざらしになっていることを考慮した結果」らしい。(178)
「新たに切りひらかれた狭い径はうねるように岩塊の左手に折れ、新しい地下廟へと続き、その入口には、遠くから私にも見えたように、趣味よく青銅色に鍍金された鉄製の格子門がとりつけられていた。」(76)	「私は公園を抜けて散歩することを申し出た。地下廟に続く下の道を避け、2人を導きながら急勾配の勝手を知った小径を登り、廃城の高い場所に至った。」(875)	「がっしりとした鉄製の扉もまた、同様に補強されていた。」(179)
「大胆に、鉄のですりの付いた階段が、半ば崩れかかった物見の塔の内壁づたいに上へ延びて玄関に通じており、その先にはゴシック風の調度をあつらえた部屋が二つあった。」(77)		
「私は窓を開けた。そこに一望できたのは、シュネーコッペ山やエルベ河の源流域、2か所の雪だまり、昔から威厳に溢れたリーゼンゲビルゲの尾根、それにシュレーゼンの肥沃な平野の一部だった。」(77f.)	「私は叔母に部屋の内を見せてほしいと言った。そこにはゴシック風の瀟洒な寝室があり、半円を描く壁の3つの窓からは果てしなく広がる丘や谷が見渡せ、さらにその先にはシレジアの高原が、リーゼンゲビルゲの高い峰々が見え、なかには雪をかぶっている所もあり、赤く薔薇色に輝く素晴らしい日没の光を反射していた。」(876)	
「私の足下には鉄の格子門があって、ツェツィーリエの眠る冷たい岩壁の地下廟への入り口となっていた。」(78)		地下室は「わたしにあてがわれた寝室を含む部分の真下の奥深くに位置している。」(179)
語り手の寝室には叔父の肖像の横に亡くなった金髪のツェツィーリエの絵も掛けられている。「姉妹がお互いによく似ていることを今になって気づいた。ただ姉のユーリエの髪は褐色だった。」(78f.)		「このときわたしは、アッシャー兄妹が瓜二つなのに気づく。」(179)
寝室から長い廊下に出ると、昔の騎士の間に続き、アーチ状の窓やゴシック風の調度、古い鉄製の暖炉が昔のまま、壁には「中世の弱肉強食の時代」の戦闘画が掛けられている。その絵は城の昔の所有者ゴットハルトに倒された騎士ブルーノの断末魔を描いたもの。	「長い廊下は大きな塔の各部屋を見事な古い時代の貴族の間に結びつけていたが、広間はそこそこ老朽化から守られており、「広間のどの隅にもアンティーク調の大きな鉄製暖炉が置かれ、家紋が奇妙な形で彫りつけられていた」。壁にかかった「中世期の2枚の戦闘画」に描かれていたのは「勇敢なロートフェルスのブルーノ」で、「300年ほど前に一騎打ちで、〈野盗の城砦〉の貴族ゴットハルトに殺された。」(875)	わたしが嵐の晩にロデリックの前で朗読する「サー・ランスロットの描写」する騎士エセルレッドの龍退治の場面(186-187)

クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)	ポー「アッシャー家」(1839)
<p>廊下の先に「鉄製のアーチ状の扉」があり「頑丈な鉄の門が下ろされ、大きな南京錠がぶらさがっていた。」この扉から「古い角塔へと続き」、「その下には以前城砦の地下牢」があったが、現在塔の上部は「物置」になっている。(83f.)</p> <p>黒い扉に重たい門に大きな錠前を付けているのは、「亡くなった夫が娘たちが大きくなったら、冬場はブラハで過ごすことを考え」、「その間貴重品をそこにしまっておく」つもりだったからで、そのためそこだけ「火に強い天井になって」いる。(84)</p>	<p>「廊下に戻ってみると、その先に低い位置にアーチ状の扉が見え、鉄の棒と、大きな南京錠で厳重に閉められていた。そこはかつての武器保管庫の入り口で、低い角塔の上階すべてが保管庫となっていたが、城の地下牢も含まれていて、がっしりとした耐火性の造りになっていて、叔母は安全のためにそこに食器類や貴重品を置いていたのだが、オーストリア軍の逃亡兵や野盗の連中が、私有財産の略奪行為に関わるようになり、警察によって逮捕・排除されるまでの間そういう目的で使っていた。」(875)</p>	<p>「はるかなむかし、封建時代には地下牢における最悪の目的のために用いられ、それからさらにのちの時代には火薬やそれに類する可燃性の高い破壊兵器の貯蔵庫として使われた風情であるのは、その床をはじめ、わたしたちがそこへ行くのに通っていった長いアーチ道が、じつに注意深く銅で覆ってあったためである。がっしりとした鉄製の扉もまた、同様に補強されていた。」(179)</p>
<p>黒い扉の上には「青ざめた尼僧」姿のレア姫の肖像画が掛けられている。レアは騎士のゴットハルトと結婚の約束をしたものの、父の反対で修道院に送られてしまった。ゴットハルトは彼女を誘拐し、この城に連れてきた。正式の婚姻はできないまま子を産んだレアは、良心の呵責から子を殺し、毒を仰いで自死する。レアの父親はゴットハルトに無残に切り倒されたブルーノだった。(85f.)</p>	<p>「不運なりア姫の肖像画」を叔母が説明する。「リアは男爵の広間の死にゆく騎士の娘」で、「彼女の若い情熱は、父と敵対するゴットハルトに捧げられたが、ゴットハルトは森の所有権をめぐる彼女の父親の憎悪を買って」しまった、有無を言わさぬ親の意向で修道女のヴェールをかぶらされることになった」リアは、「誓いを破り、愛する男とこの城に駆け落ちし、ここで可愛い男の子を産んだ」。ゴットハルトが彼女のために教会に特免権を求めたが、かなえられず、「彼女の傷ついた良心が分別を失わせ、朦朧とした状態でリアは幼子を殺め、毒を仰いだ。」(876)</p>	<p>アッシャー家の屋敷をロデリックは「この悲劇の館」(165)と呼ぶ。</p>
<p>下の屋敷から「私」の荷物を(ダスターコートにピストル数丁、剣)運ぶ猟師のニコラス爺さんが、廃城にはツェツィーアが亡くなってからレア姫の幽霊が出るので、自分はとても泊まる気になれないと語る。(91f.)</p>	<p>内容は左に同じだが、荷物を運ぶのは「ボヘミアの猟師」である「カスパー老人」。「カスパー」は「私」に「少佐」と呼びかける。(876-877)</p>	<p>「わけても、痛ましいほどの印象が残っているのは、フォン・ウェーバー最後のワルツの幻想的なメロディを奇妙にひねって編曲しては誇張してみたときのことである。」(169) [猟師カスパーはフォン・ウェーバーの「魔弾の射手」の登場人物と同名]</p>
<p>叔母の屋敷の晩餐の席で相席した「郡長と2人の書記」に廃城の寝室で話し相手になってもらえないか、誘いかけてみるものの、「大柄な若者たち」も体のいい口実をもうけて、申し出を丁重に断る。(93f.)</p>	<p>「ナポレオンの鉄腕からドイツを解放した戦闘において、死と直面した折にも人間の兵隊に恐怖を感じることなどなかったし、プロイセンの人文教育のおかげで超自然的な魂や霊などは到底理解できなかった。しかし真夜中の迫るなかたった一人で座っていると、地下廟のすぐそばにいること、男爵の広間、瀕死のブルーノの怖ろしい絵、青ざめた女とその血まみれの幼子のさらにぞっとさせる肖像画が自分のすぐ近くにあることが思い起こされた。」(877)</p>	



クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)	ポー「アッシャー家」(1839)
叔母の屋敷で嵐をやりすごしてから、廃城の寝室に戻るが、「私は眠れなかった。」(96)	「私はこういった一連のイメージを頭のなかから追い払う必要を感じていたが、そのせいでもう眠れなくなった。」(877)	「時間がどんどん過ぎていくのに、睡魔が一向に襲ってこない」(181) なか嵐が迫っている。
叔父の書架を開け、「最初に手にとった本は讚美歌集」だったが「死についての本は読む気になれず、他の本に代えてみるとそれは「神学者ジテニスのエルピツォン(または死におけるわが永続)」で、「この蔵書はすべて死の思い出に捧げられたのか」と思う。(96f.)	「窓と窓の間の壁龕に数冊の本を見つけ、その一冊を開くと、「死や永遠を主題にした讚美歌集」だった。もう1冊は「死についてのエッセイ」、3冊目が「老年と病いの慰め」(877)。	
「3冊目に手にとったのは小型の袖珍本文庫だった。13世紀の聖堂騎士団を描いたきわめて奇妙な書物だった。私が開いた頁には、某所で騎士団員を偲んで行われた追悼の儀式が書かれていた。」(97) その騎士団員は「私の家族」の先祖だと分かる。	最後に手に取ったのが「黒いビロード皮で奇妙に装丁された小型本」で、「聖堂騎士団の歴史を詳細に論じ、古い時代の黒い活字で印刷されていた」。「タイトルから13世紀の珍しい奇妙な手稿によるもの」と分かる。(877)	「もっとも彼が何より欣喜雀躍したのは、四ツ折判でゴシック体のとてつもない稀覯本を熟読しているときだった。その本は忘れられた教会の祈禱書であり、『マインツ教会合唱団による死者のための通夜』と題されていた。」(177-178)
大頭領と7人の頭領の死者に関する問答の後、7人の徒弟(Lehrlinge)が棺を開け、大頭領と問答を繰り返し、最後に7人の職人(Gesellen)が棺のなかの死者に追悼の儀礼を施し、棺に釘を打ち、頭領たちが歌うレクイエムの「深き淵より」に全員が唱和する。視えない合唱団が「リベラ」を歌うと、すべての蠟燭が消える。(97-111)	問答の会話部分がほぼクラウレン原文通りだが儀式の3回目問答が省略されている。位階は以下の通り「大頭領」：Großmeister = Grand Master, 「聖堂騎士」：Templer = Knights, 「兄弟」：Brüder = Brothers, 「頭領」：Meister = Preceptors, 「職人」：Geselle = Knights Companion, 「徒弟」：Lehrling = Novice (877-880)	「とりわけ最後に挙げた書物の説く儀礼について、それがこのロデリック・アッシャーという憂鬱病患者におよぼしたと思われる作用について考えざるをえなくなったのは、彼がある晩、マデライン姫がもはやこの世の人ではないことを知らせるとともに、その屍を二週間ほど(最終的な埋葬をするまでのあいだ)この屋敷の中にある無数の地下室のひとつに保存しておくつもりだと明かしたときである。」(178)
儀式の場面を読んでいると、部屋の外で3回にわたり不審な叩く音が聞こえる。「私は興奮して幻想のなかにあった。私は実際の耳に届かない音聞いてしまったのだ。」(101)	「大頭領の鉄槌の一振りが、私の耳ではなく、私の幻の耳に届いたのだ。」(878)	
読書のさなか再び3回叩く音、さっきよりもはつきり。さらにかすかな泣き声も。「2つともたしかに聞こえた。」「私は無意識のうちに燭台を手にした。廊下に出ようとした。無数の予感が心に浮かんだ」が、自分を抑え、外には出ず、再び「黒いビロード装の本を手に取った。」(103f.)	「このとき再び雷鳴が向こうの山越しに響いてきた。一本が私の震える手から落ちた。一突然四肢が震えだした。身体じゅうの血液が心臓に逆流し、激しい鼓動となった。私は遠くの出籠の音を聞いたのだと思い、燭台を手に、扉に近づき耳をそばだてたが、気になるような音は聞こえなかった。〈莫迦ばかしい!〉自分がどうでもいいことを感じたつもりになっていたのだ。〈あれは嵐の風のしわざにちがいない。長い間うなりをあげ、城の幅のある煙突で音をたてていたのだ。〉」(879)	「隣接する階段から軽い足取りが聞こえる。アッシャーの足音だ、とすぐにわかった。その直後、彼は落ち着いた調子でわたしの寝室の扉をノックし、ランプを携えて入ってきた。その表情はあいかわらず死人のように青ざめていたが、さらにこんどは、その眼に狂気のあまり高揚しきった気配が表れていた。」(182)
それが3度目になると大きくなり、「恐怖で私は身体を動かすことができなかった。それは鉄と鉄がぶつかるような音だった。」	左とほぼ同じ展開。	

クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)	ポー「アッシャー家」(1839)
ツェツリーエの眠る地下の霊廟から2人の女性の讚美歌を歌う声が聞こえてくる。窓を開け、下を見ると地下廟に灯りがともし、「村の教会の鐘が11時を打った。」(113-115) 堅琴の伴奏による「聖クララ修道院の尼僧の歌」(116)の3詩節が挿入。	「突然厳粛な音楽が部屋を満たした。響きは堅琴のようで、崇高な感情とともに高まり、この時間この場所で、私は地上の音楽とは思えないほど」だったが、「私はすべての音符をなぞることができた。その瞬間、近くの聖クララ修道院の鐘が下の谷から聞こえ、12時を告げた。」聞こえてきた音楽は「モーツァルトのレクイエムの美しい冒頭部」だった。(880)	ロデリックがギターを弾きながら歌う幻想曲の歌詞「魔の宮殿」6詩節の挿入。
「私」は抜き身の剣と燭台を持ち、外に出て地下廟の格子門からなかを覗くと、中央の「盛り土の上に置かれた「蓋をされた棺」のそばに跪く、「青ざめ、霊の影のような」「美しい金髪の娘」の姿を認め、「胸元の白薔薇」から肖像画を思い出し、黒い門を揺さぶりながら、「ツェツリーエ!」と絶叫すると、娘の叫び声とともに灯りが消える。(117-119)	地下廟の中央の「大理石の台座には蓋をしていない石棺が置かれ、なかに贅沢な装飾をほどこされた棺が収められ、その黒い絹の布がめくりあげられていた。白い花柄の衣装に身を包んだ女性が台座に跪いていた。」「彼女は愛らしいブロードで、髪質は絹のように滑らかで、色は輝かしいとび色」だった。見える部分の顔は「灰のように青ざめ」、「胸元の白薔薇」から、誰だか分かり、「ああ、セシリア!セシリア!」ととりつかれたように叫ぶ。(881)	
再び寝室に戻った「私」は再び廊下で鉄槌を叩くような音を聞き、「瀕死の者が発する押し殺したうめき声と苦悶に満ちた喘ぎ声」、さらには「遠くで武具のきしむ音とそれに続く嘲り笑う声」を聞きとり、誰かが決闘をしている騒音だと判断。剣と燭台を手に廊下に出て騎士の広間の前まで来ると、奥のレアの肖像画のかかっている扉が開いていた。なかを覗くと全身甲冑に身を包んだ騎士が2人立っていた。恐れをなして逃げる「私」は追いかけるられる気配を感じると、ダスターコートの裾を引っぱられ、思わず後ろ側をめった刺しにする。(120-123)	自室に戻る途中で廊下の奥から物音を聞きつけた「私」は武器庫に通じる扉が開いて、甲冑に身を包んだ背の高い騎士が、片手に剣、もう一方に燭台を持って出てきた。「私」は寝室に戻り、一連の事態の解明を決意する。	
すべての出来事の謎解きを"Aufschluß"(解明篇)という形で別だてにし、架空の語り手が「読者」に対して注意を喚起する文が挿入される。	謎解きの部分を一つの物語に統合し、1人称の語りが続く。	

クラウレン(1812,18/27)	エディンバラ・マガジン翻案版(1828)
<p>剣でめった刺しにしたのは、自分のダスターコートに、それが騎士の間の暖炉の開口部に挟まっていた。この扉の部分がすき間風で開いたり閉じたりし、油をさしていないせいで「すすり泣き」に聞こえた。「私」を追いかけてきた甲冑の騎士は、ブルーノとゴットハルトではなく、物置の見張りに泊まって庭師見習いのゲオルクとハインリヒで、退屈のきに物置にあった武器で決闘のまねをしていた。歌声については2人にも訳がわからず、改めて3人で地下廟に確かめに行くが、灯りが消えたままだった。「私」は寝室に、庭師の若者は物置に戻った。(169-174)</p>	<p>再び廊下で鉄と鉄の触れ合う音とうめき声が聞こえる。ブルーノとゴットハルトの決闘がまだ続いているかのようだが、疑いが芽生える。この城が数か月不在のままになっていた間に、ジプシーか野盗の根城になり、男爵夫人の従僕たちを脅かすために幽霊の真似をしているのではないか。剣と燭台を手に調査のために再び廊下にするが、白地の長衣を着ていたので古城の亡霊の役を演じることになる。武器庫での決闘は依然として続いていて、「私」は2人の人間が甲冑をまとって闘っていることを確認し、なかに入ると、2人は驚いて決闘をやめ、追いかけてきた。長い部屋着の裾が引っ張られるのを感じるが、それは人間の手でも人間でない存在によるものでもなく、広間の暖炉の鉄製の開口部にひっかかったためで、「廊下の開口部から広間の暖炉に燃料を入れる仕組みになっていて、ドイツじゅうの新しい家屋の多くで採り入れられていた」(883)。追っ手の2人と対峙して分かったのは、彼らは叔母の庭師で、オーストリア軍の元竜騎兵の老人だった。叔母の執事の命令で、武器庫所蔵の貴重品の見張りをしていたが、嵐で眠れなかったので、武器庫の甲冑で決闘して時間をつぶしていた。執事は「私」が城の居室に泊まることを2人に教えていなかったので、野盗と勘違いして追いかけたのである。(883)</p>
<p>朝食をとるため城にあがってきた叔母とユーリエから昨晚の椿事について報告を聞く。郡長の娘イエットヒェン・フォン・アイヒベルクが花婿ヴァイグルと深夜に訪れ、親友だったツェツィーリエの棺の前で、別れを告げ、結婚の誓いを捧げた。3人は思い余って讃美歌を歌い、花婿がユーリエの置いていた堅琴で伴奏した。第3節目のところで、「ツェツィーリエ」という叫びを聞いて、慌てて灯りを消し、屋敷に帰ったというのである。(175-178)</p>	<p>地下廟での神秘的な合唱は謎のまま、「私」は嵐にもかかわらず朝方まで寝入ってしまう。叔母と姪が朝食にやってくると、ジュリアの顔色がすぐれない。昨晚「私」と別れてから、聖クララ修道院の尼僧たちが、亡くなった姉を追悼する深夜のレクイエムの合唱にやってきた。ジュリアは堅琴で伴奏を担当した。尼僧たちは毎週2度、追悼のために歌いに通っていた。ジュリアが演奏後、棺のそばに跪いて祈りを捧げていると、外で「セシリア!セシリア!」と叫ぶ声がしたため、驚いた尼僧たちは地下廟の隠し部屋で息をひそめていた、という。(884)</p>
<p>叔母からは不幸なレア姫の肖像画を思い出としてプレゼントされ、ユーリエは剣で切り刻まれたダスターコートを縫い合わせてくれた。(178)</p>	<p>ジュリアが縫いつくろってくれるのは「無残に切り刻まれた私の部屋着」で、叔母がレア姫の肖像画をプレゼントしてくれたのは「この絵を外せば、不幸なレア姫がもう2度と夜中に城をうろつかなくと村人たちに信じてもらえるから」(884)だった。</p>
	<p>数週間滞滞して負傷から体調を取り戻した「私」は、悲しい思い出から遠ざける意味で、叔母とその娘を秋と冬の間の数か月「ベルリンの母の家」で過ごしてもらうことにした。翌夏「野盗の砦」を訪れた「私」は「健康と幸せ」の喜びをかみしめていた。「わが憧れのジュリアの夫」として。(884)</p>

## 【付記】

折りにふれ、さまざまな企画にお声をかけてくださった異孝之兄への感謝とオマージュを込め、「アッシャー家」の参照テキストには格調高い異訳を用いた。本稿が、これまで浴してきた学恩へのささやかなお返しとなれば幸いである。